

2012年度美術科教育学会地区会 in 大阪

研究発表＋討議

[絵画・以降]の時代に構想する絵画教育 —そのビジョンとカリキュラム—

■日時：2012年12月22日（土）12:30-17:00

■会場：大阪芸術大学ほたるまちキャンパス
（大阪市福島区 [堂島リバーフォーラム 3F]）
（懇親会：JR 福島駅付近 17:45-20:00）

■主催：美術科教育学会

■共催：大学美術教育学会・日本美術教育学会・和歌山大学美術教育研究会

参加自由（要・事前申込 12/17(水)まで）

会場準備のため、お手数ですがeメールで下記[お申し込み先]まで「氏名・所属・懇親会出欠」をご一報下さい。

かつて美術教育の中核にあった「絵画」。

21世紀の美術教育において絵画は

どのように機能し、位置づけられるのでしょうか？

絵画教育のビジョンをめぐる三世代からの提案を示し

それらを批評・討議することを通して

美術教育の中長期的な課題と視野を形成することを目指します。

架橋としての「地区会」-連携と交流

美術科教育学会では、地域の美術教育の振興と交流の活性化を願って、以前より「東地区会」と「西地区会」を開催してきました。今年度から「地区会」と改称し、より多様で柔軟な企画へと展開する予定です。

今回の地区会は、美術教育関係の三つの学会が連携して開催することになりました。教育実践と研究、教科内容学と教科教育学の連携と交流の場になることを願っています。

1. 開会 [12:30-]

■開会にあたって：主催者代表

■主題趣旨説明：コーディネーター

2. 研究発表 [12:55-]

■基調提案[理論的枠組みから]：永守基樹（ながもり もとき 和歌山大学／美術教育学）

[実践例に基づいて]：湯川雅紀（ゆかわ まさき 画家・和歌山県立田辺高等学校）

：西井恵美子（にしい えみこ 和歌山市立松江小学校）

■招待発表＝提案1：大嶋 彰（おおしま あきら 滋賀大学／絵画）

■招待発表＝提案2：渡邊晃一（わたなべ こういち 福島大学／絵画）

■招待発表＝提案3：喜多村徹雄（きたむら てつお 群馬大学／絵画）

3. 批評・討議 [15:20-]

■コメンテーター：岡本康明（おかもと やすあき 京都造形芸術大学／現代美術論・美術教育学）

：小野康男（おの やすお 横浜国立大学／美学）

：山木朝彦（やまき あさひこ 鳴門教育大学／美術教育学）

：小澤基弘（こざわ もとひろ 埼玉大学／絵画）

司会：佐藤賢司（さとう けんじ 大阪教育大学／美術教育学）

※討議は[コメンテーター]-[フロア]-[提案者]の三者が参加するかたちで行う予定です。

提案者・コメンテーターのプロフィール

■招待発表＝提案者

大嶋 彰 (滋賀大学 教授／絵画)

1951年新潟生。東京藝術大学大学院(修)修了後、上越教育大学、ペンシルヴェニア大学大学院客員芸術家(文化庁派遣,1993-94)を経て2001年より現職。フォーマリズム以降の多義的な絵画を追求する作家活動とともに、ポスト構造主義の思想や身体論と深く結びついた美術教育論を展開する。2012年度から大学美術教育学会理事。教科内容学としての絵画と美術科教育の関係性にも深い関心を寄せる。個展、グループ展多数。共著に『絵画の教科書』(日本文教出版,2001),『日本美術 101 鑑賞ガイドブック』(三元社,2008),『西洋美術 101 鑑賞ガイドブック』(同左)など。

渡邊晃一 (福島大学 准教授／絵画)

1967年北海道生。筑波大学大学院(修)修了。東京藝術大学大学院(美術解剖学)在学後、1995年より現所属。人体の生命形象や、人と自然との関係性を問い続けている。主な個展に川口現代美術館、銀座コバヤシ画廊、Zoller Gallery (ペンシルバニア)、Century Gallery (ロンドン)など。舞踏家大野一雄とのコラボ、舞台美術『平山素子 LifeCasting』(新国立劇場・朝日舞台芸術賞)、各界文化人の「Life Hands」等でも注目される。身体と美術の深い関係性に美術教育の基盤を探る論者多数。近年では幼児の「絵・画」の表現と認識との関係に焦点を当てた研究も展開。震災以降、子どもへのWS活動や福島現代美術ビエンナーレの企画監修は、国際的に紹介されている。近著に『渡邊晃一作品集 テクストとイマージュの肌膚』(2011,青幻舎)。

喜多村徹雄 (群馬大学 准教授／絵画)

1976年奈良生。金沢美術工芸大学大学院(博)学位取得(2005)。2007年より現所属。人や物と社会の「関係」に着目し、その構造の脆弱さや強固さを視覚化する作品を複数のメディアを用いて発表している。主な個展にトーキョーワンダーサイト本郷、トーキョーワンダーウォール都庁2004。グループショーに、「中之条ビエンナーレ2011」(群馬県吾妻郡),「The rising generation 8」(渋川市美術館),「kanazawa eye Vol.2」(金沢21世紀美術館),「現代日本美術展」(東京都美術館)他多数。トーキョーワンダーウォール2004入賞。作者・作品・鑑賞者相互関係の変容をテーマに研究を展開する一方、教員養成における絵画教育を対象認識と自己更新の方向性から構想中。日本教育大学協会美術部門の特別課題検討委員会委員。著書に『視ることの強度』(博士学位論文,2006),『美術科教育の基礎知識 四訂版』(分担・建帛社,2010)。

■基調提案者

永守基樹 (和歌山大学 教授／美術教育学)

1953年東京生。大阪教育大学大学院(修)修了。佐賀大学等を経て、1992年より現所属。色彩、表面、メディア等のテーマを通じて美術教育における「基礎」を探る。また、佐賀、和歌山において地域の美術教育者との連携研究(題材・カリキュラム開発)を展開。著作に『美術教育の展望と課題』(共編著,建帛社,2000),『ルソーの時—インタラクティブティの美学』(分担,日本文教,2003)など。研究チーム誌(編著)として『造形教育学実践報告』No.1-2(佐賀大学造形教育学実践研究会,1988-1991),『matrix』No.1-5(基礎造形教育学研究会,1996-2007)など。

湯川雅紀 (画家・和歌山県立田辺高等学校 講師)

1966年和歌山生。大阪教育大学大学院(修)修了後、デュッセルドルフ芸術大学にてマイスターシューラー取得。現代の抽象を追求し、VOCA展大賞(1998)受賞後も日独の双方で積極的な発表活動を行う。東京国立近美、都現美、和歌山県立近美、横浜美などに作品収蔵。ドイツにおける作家としての形成過程や美術教育体験を基礎とした美術教育の研究も。論考に「ドイツにおける芸術家を取りまく環境」(『いまいるところ／いまあるわたし』展カタログ,宇都宮美術館,2007),「美術館と小・中・高・大の連携によるポップアート題材群の開発と実践」(共著・『和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要』No.22,2012)など。

西井恵美子 (和歌山市立松江小学校 教諭)

1972年和歌山生。京都教育大学で発達障害学を専攻して卒業し、和歌山市小学校教員に。和歌山大学附属小学校で図工科教育を担当(2004-2010年度)後、現職。造形遊びにおける素材体験を通しての身体的な学びに強く惹かれる。描画の指導においても、子どもの身体の深い場所から生まれる表現に学びを見たいと考えている。授業実践に基づいた論考に「木でできタワー～木に触れる・木とかかわる・木でつくる～」(『教育美術』2012年8月号),「芒・蒲を描く」(『美術教育実践研究』,和歌山大学美術教育研究会誌,2012)など。



■コメンテーター

岡本康明 (京都造形芸術大学 教授/現代美術論・美術教育学)

1952年京都生。大阪教育大学大学院(修)修了。高校教員、宇都宮美術館学芸課長を経て、2006年より現職。高校教師として身体性を浮上させるラディカルな教育実践を行い、美術館のキュレーターとしてオリジナリティ溢れる現代美術展の企画を多く成功させる。他方、ワークショップの場における美術教育実践と研究を継続。共著に『絵画の教科書』(日本文教出版,2001)、『ベーシック造形技法』(建帛社)など。

小野康男 (横浜国立大学 教授/美学)

1953年岡山生。神戸大学大学院(博)単位取得満期退学。佐賀大学を経て現所属。東学大連合大学院教授を兼任。フランス現代思想の深い知見に基づく美学、芸術学の論考を行う。翻訳としてJ=F・リオタールの訳書を中心に、『ホモ・エステティクス』(L・フェリー,法政大学出版局,2001)、『時間の前で』(ディディ=ユベルマン,法政大学出版局,2012)等がある。教育人間科学学部長などを歴任。行政も含めた教員養成、美術、教育への広い視野と展望を持つ。

山本朝彦 (鳴門教育大学 教授/美術教育学)

1955年東京生。横浜国立大学大学院(修)修了。大分大学を経て、現職。兵教大連合大学院教授を兼任。美術教育の総体にクリティカルに関わる姿勢を背景に、現代の美術の動向と美術教育思想を繋ぐ視点を模索。教育実践にかかわる研究としては、鑑賞教育の多様なアプローチについて紹介と考察を重ねている。編著『美術鑑賞宣言』(日本文教出版,2003年)、分担執筆『緑色の太陽—芸術による学校再生のシナリオ』(国土社,2000)、論文「美術教育思潮におけるリアリズム表現の受容とその問題点」(美術科教育学会誌 29号,2008)、「テイト・ギャラリーの歴史及びその変貌と教育機能の現代化」(大学美術教育学会誌 38号,2006)など。

小澤基弘 (埼玉大学 教授/絵画)

1959年愛知生。筑波大学大学院(博)単位取得満期退学。Ph.D.1992年より現所属。現在、東学大連合大学院教授、東京大学大学院客員教授を兼任。安井賞展、現代日本美術展、個展(紀伊國屋画廊、村松画廊他)に出品。ドローイングに根ざす絵画を展開。同時に制作学などをベースにした多くの著作・論考を発表。また独自の視点からのドローイング教育を提唱し、多方面から高く評価されている。近著に『創造のたね:ドローイングのはなし』(日本文教出版,2011)、『絵画の創造力—ドローイング活用法』(花伝社,2012)など。

■討議司会

佐藤賢司 (大阪教育大学 准教授/美術・工芸教育学)

1966年岩手生。上越教育大学大学院(修)修了。2001年より現所属。

「工芸」概念を問い直す論考を中心に、造形教育研究を展開するが、いずれもその基底に子どもの身体性がある。染色作家としても活躍。制作と理論、アートと工芸、造形と教育を通底する姿勢を持続。共著に『美術教育概論』(日本文教出版2009)、『美術科教育の基礎知識』(建帛社2010)、展覧会に「Fiber Art from Asia & Europe(Lithuania,2012)」「The Nature Spirit: Contemporary Japanese Textile Art (Spain,2011)」など。



和歌山大学附属中学校2年生生徒作品(部分),2012

提案と討議の前に：絵画教育のモダニズムへ／モダニズムから

■絵画・以降の時代に

チゼック以来、絵画表現は美術教育において特権的に重要な内容でした。それは近代美術において絵画が特権的なジャンルであったことと深い関連があります。近代絵画に横溢する創造性や個性、革新や根源への志向が、近代の美術教育の理念を生みだし支えていたのです。

ところが1970年代の「美術史の終焉」と呼ばれた現象は、抽象絵画を経て純粋な視覚性へと向かう進化論的なフォルマリズムに依拠していた「絵画の歴史」にも終わりをもたらしました。以降、「絵画の復権」は何度も叫ばれているものの、その凋落傾向は続いています。

■美術教育の現代

この影響は様々なかたちで美術教育にも現れてきたように見えます。日本では、子ども中心主義をラディカルに推進しようとした「造形遊び」が、1970年前後の現代美術シーンに見られる「脱・絵画」の様々な方法を子どもの造形活動と出会わせ、近代美術教育の再生を目指しました。いわばハイパーモダニズムの動きです。他方、同時期の米国では「創造主義・以降」(ポストモダニズム)の意識はDBAE運動を生み、鑑賞や批評を重視した「美術の広がり」を見せようとしてきました。また「ビジュアル・カルチャー」へとメディアを拡大させ、アートと生活との関係を再構築することは、今日の美術教育ではグローバルに必然的な動きでありましょう。

■絵画＝教育とモダニズム

いずれの方向にせよ、「絵画」「描画」はかつての地位から大きく転落しています。ハイパーモダ

ニズムでは「絵画」(という教育のメディア)は解体されてしまいます。また、ポストモダニズムでは、多様な美術の領域・メディア・様式の相対と交錯のなかに、「絵画」(というコンテンツ)はその特権性を失うこととなります。

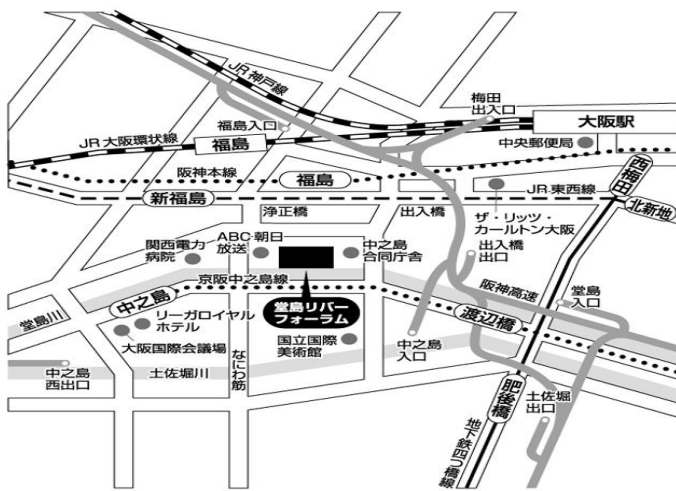
今回、絵画(の特権性)に注目する理由は、そこに近代美術のハードコアとでも言うべき諸価値の多くが結びついているからであり、それらの諸価値が近代の美術教育の理念・内容・方法のコアへと転写されているからです。私たちはこの近代絵画に由来する諸価値に代わる教育的価値を未だに見つけることは出来ていません。オリジナリティの希求と個性の伸張という自己実現、表現を通じての抑圧からの解放と救済、絶えざる否定と革新。社会との合理的な対話性は希薄ですが、近代の絵画の歴史が形成した言説と価値は、現在でも美術教育のコアであり続けていると言うべきでしょう。

■これからの美術教育と絵画

歴史的な表現のメディアとスタイルであり、伝統的な美術教育の内容である「絵画」。その絵画を、再度、今後の美術教育の基盤を構想する論議の中心に据えてみる試みが今回の地区会です。「絵画なるもの」は、美術教育のなかに在るモダニズムを浮き彫りにし、その今日における意味を再考させることでしょう。その再考のいくつかのかたちを、絵画教育の題材群やカリキュラムの構想のなかで比較検討し、論議のなかに今後の美術教育への視座を形成できることを願っています。

[文責：永守基樹]

4



大阪芸術大学ほたるまちキャンパス

【堂島リバーフォーラム 3F】

〒553-0003 大阪市福島区福島1-1-12

TEL 06-6450-1515

■JR 環状線「福島駅」より徒歩約10分

■JR 東西線「新福島駅」(2番出口) 徒歩約5分

■阪神本線「福島駅」(3番出口) 徒歩約5分

■大阪市営地下鉄四つ橋線「肥後橋駅」(3 または 4番出口) 徒歩約10分

■京阪中之島線「中之島駅」(6番出口) 徒歩約3分

朝日放送の東隣です。エレベータで3Fへどうぞ。

※会場には駐車場がございません。

■コーディネーター：永守基樹 (和歌山大学)

■企画運営協力：末延國康 (大阪芸術大学)、宇田秀士 (奈良教育大学)、佐藤賢司 (大阪教育大学)、

竹内晋平 (奈良教育大学)、丁子かおる (和歌山大学)、渡邊美香 (大阪教育大学)、和歌山大学美術教育研究会

■お申し込み・お問い合わせ先：永守基樹 nagamori@center.wakayama-u.ac.jp tel.073-457-7508

要・事前申込：お手数ですがeメールで上記[お申し込み先]まで「氏名・所属・懇親会出席」を明記してお願いします。